

# 宋以前傷寒論考

岡田研吉・牧角和宏・小高修司 著／森立之研究会 編  
A5判／並製／640頁／定価 本体8,000円＋税



画期的な傷寒論研究。



千年来の『傷寒論』の  
疑問が、いま氷解する。



江戸医学館以来の、  
日本の誇るべき  
傷寒論研究。

[定説を打ち破る「真実」の数々]

『傷寒論』は、どのように書き換えられたのか。  
『宋板傷寒論』に隠されたミッシング・リンク。

『黄帝内経』『諸病源候論』『千金要方』『千金翼方』『外台秘要方』『太平聖恵方』  
など、数多の文献を通じた考証と鋭い洞察力によって、その歴史の変遷が明らかになった。

- ・陽病・陰病に対する治療原則の変遷
- ・発汗剤として用いられていた附子
- ・「陽明病胃中寒」から「陽明病胃家実」へ
- ・病態概念の変化に伴う、条文の移動・書き換え

<付録CD-ROM>『宋板傷寒論』条文テキスト

中医学を学ぶための雑誌『中医臨床』（季刊）ますます面白く、実用的な内容になっています。

東洋学術出版社

ご注文は、メールまたはフリーダイヤルFAXで

FAX.0120-727-060

〒272-0822 千葉県市川市宮久保3-1-5 / TEL.047-371-8337 / E-mail: hanbai@chuui.co.jp / ホームページ ●http://www.chuui.co.jp/ ●http://www.chuui.com/



# 宋以前傷寒論考

## ◆本書の主な目次

森立之研究会の歩み 〈岩井祐泉〉

鼎談 〈小高修司(司会)・岡田研吉・牧角和宏〉  
漢方研究の道を歩き出したきっかけ  
古代『傷寒論』と宋代以降の

『傷寒論』を見分けるポイント  
『宋板傷寒論』の成り立ちとさまざまな『傷寒論』  
『宋板傷寒論』の特徴と研究意義  
これまで理解できなかった条文がわかるようになった

少陽病、半表半裏と和法について  
『宋板傷寒論』以降に変化した陽明病の治療方針  
陽病・陰病に対する治療原則の変遷  
『傷寒論』が論じる病態変化

「六経指綱証」と「時系列傷寒」  
用薬の違いから『傷寒論』を検証する  
発汗剤として用いられていた附子  
『宋板傷寒論』の処方全体からわかること  
条文比較を通して治療方針の変遷を追う  
くつがえる『傷寒論』の常識

- ①「主る」「宜し」「属す」に違いはない
  - ②「証と処方」は鍵と鍵穴ではない
  - ③条文が六病位を移動している事実
  - ④「併病」と「合病」に違いはない
- 病態概念を基本とした臨床の優位性  
今後の漢方研究への提言と今後の目標

ほか

各論1 〈岡田研吉〉

旧方に始まる経方の発展  
『小品方』に登場する名医と、異なる流派の存在  
『宋本傷寒論』に引き継がれた辛甘派——後序の検討  
『医心方』に残る古代の傷寒の治療法  
『諸病源候論』と『太平聖恵方』

ほか

各論2 〈牧角和宏〉

- 1. 『宋板傷寒論』(明・趙開美本) について
- 2. 『傷寒論』のいくつかのテキストについて
- 3. 傷寒三陰三陽の病態論について
- 4. 『宋板傷寒論』の特殊性
- 5. 『宋板傷寒論』後序について

各論3 〈小高修司〉

- 1. 蘇軾(東坡居士)を通して宋代の医学・養生を考える
- 2. 隋唐代以前の用薬法について考える
- 3. 八味丸と六味丸の方を歴史的に考える
- 4. 桂枝と桂枝湯を考える
- 5. 五苓散考
- 6. 「留飲・宿食 + 風寒邪」の自験から考えたこと
- 7. 柴胡と煎胡
- 8. 敦煌古医籍に見る「肝」の治法について

本書の意図するものは、宋以前における医学・薬学、特に『傷寒論』の真の姿はいかなるものであったかを探ることにある。それはつまり原義の意味における復古であり、目指すものは真の古方派であるともいえよう。その真意は従来中国医学、日本漢方のあり方考え方を否定するものではなく、宋以前には一般的でありながら、歴史の中で埋没してまった医学薬学の理論を発掘することで、それらを含めたより広い理論にもとづく、今以上に臨床的な効果を出しうる医学の形成にある。  
(小高修司「はじめに」より抜粋)

## 鼎談の内容の一部(抜粋)

これまで理解できなかった条文がわかるようになった

牧角：三陰三陽論だけでなく、不可不篇も読まようになると、いろいろ小情報が得られます。例えば、不可不篇だけ「条文」処方だけでなく、意味不明な条文があります。「宋板傷寒論」不可不篇4条には、大柴胡湯・小柴胡湯の両方が書かれているので、「宋板傷寒論」三陰三陽論では25条を見たと大柴胡湯のほうは削除されています。三陰三陽論だけではなかったと割りますよ、という例ですね。

①25(論明7) 腹満不減、減不足言、當下之、宜大柴胡 大承氣湯 三十九用前第一方  
②18(司下15) 腹満不減、減不足言、當下之、宜大柴胡 大承氣湯 十三用前第一方

牧角：また、不可不篇を読むと、三陰三陽論に足りない病態概念が出てくることもよまあります。例えば、『宋板傷寒論』27条を読んだだけでは、条文前半の「司下之」に対する処方不明です。でも、『板傷寒論』不可不篇190条を参照すると、元は「大柴胡湯を用いて下し、さらに腹數不解、場合はは抵湯に切り替える」という条文であったことが分かります。

③27(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之 假令下、脈不解  
④190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
⑤190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
⑥25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
⑦190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
⑧18(司下15) 腹満不減、減不足言、當下之、宜大柴胡 大承氣湯 十三用前第一方  
⑨25(論明7) 腹満不減、減不足言、當下之、宜大柴胡 大承氣湯 三十九用前第一方  
⑩190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
⑪190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
⑫25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
⑬190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
⑭190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
⑮25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
⑯190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
⑰190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
⑱25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
⑲190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
⑳190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
㉑25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
㉒190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
㉓190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
㉔25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
㉕190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
㉖190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
㉗25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
㉘190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
㉙190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
㉚25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
㉛190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
㉜190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
㉝25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
㉞190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
㉟190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
㊱25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
㊲190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
㊳190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
㊴25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
㊵190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
㊶190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
㊷25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
㊸190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
㊹190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
㊺25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
㊻190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
㊼190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方  
㊽25(論明7) 病人表裏無証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、假令下、脈不解  
㊾190(司下21) 合熱而脈浮者、至七八日不大便者、有微喘、宜大柴胡湯 四十一用前第二方  
㊿190(司下21) 病人無表裏証、發熱七八日、雖脈浮數者不可下之、宜大柴胡湯 十九用前第一方

「これまでのどの解説書にもなかった。  
『傷寒論』の疑問に対する答え——」

くつがえる『傷寒論』の常識③ …… 条文が六病位を移動している事実

牧角：次に「いつたい小建中湯は陽病の処方か、それとも陰病の処方か」という、問題に触れたいと思います。小建中湯は『宋板傷寒論』では太陽篇の条文ですが、『太平聖恵方』巻八では厥陰篇の条文なのです。条文の引継ぎが行われているわけです。「太平聖恵方」では「傷寒六日、陽解法、陰解法、当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯」とあり、「大柴胡湯」と「宋板傷寒論」では「傷寒六日、陽解法、陰解法、当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯」とあり、「金翼方」と「宋板傷寒論」では消えて、その条文が太陽篇に入られています。小建中湯のほかにも、「金翼方」巻八、巻九の傷寒六日、厥陰篇の条文および処方には、「宋板傷寒論」では太陽篇の条文・処方となっているのが数あるのです。

⑩0 (太陽中20) 傷寒、陽脈浮陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差者、小建中湯主之  
⑪01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
⑫08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯

牧角：また傷寒日数が異なる現象は、『宋板傷寒論』102条にも見られます。「外台秘要方」では「傷寒二三日」を「傷寒二日」にもついでています。

⑬02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
⑭01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
⑮08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯

⑯02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
⑰01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
⑱08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯  
⑲02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
⑳01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
㉑08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯  
㉒02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
㉓01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
㉔08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯  
㉕02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
㉖01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
㉗08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯  
㉘02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
㉙01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
㉚08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯  
㉛02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
㉜01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
㉝08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯  
㉞02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
㉟01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
㊱08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯  
㊲02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
㊳01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
㊴08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯  
㊵02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
㊶01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
㊷08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯  
㊸02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
㊹01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
㊺08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯  
㊻02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
㊼01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯  
㊽08-114 (厥陰5) 傷寒六日、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、宜大柴胡湯  
㊾02 (太陽中72) 傷寒二日、心中悸而煩者、小建中湯主之、五十二用前第十一方  
㊿01 (太陽柴胡1) 傷寒、陽脈洪陰脈弦、法当腹中急痛、先与小建中湯、不差、与小柴胡湯